

聖書:列王記第二2章1~18節

説教:エリヤとエリシャ

はじめに

先週はミヒヤエル先生が、中央教会での最後の説教をしてくださり、みなさんとともにミヒヤエル先生を送るときを持ちました。出会いがあれば、いつか別れのときが来ることは頭で分かりますが、実際にそのときが来るとやはり寂しく感じます。

今日のところでも、預言者エリヤとエリシャの別れの場面が描かれています。エリシャはエリヤの弟子として預言者として独り立ちしていく訓練を受けていましたが、まだまだ未熟です。ところがエリヤはもう間もなく取り去られていきます。残された時間でエリシャを一人前の預言者に育てていかなければなりません。エリヤはどうしたのか。ここに神のどのようなみこころが示されているのか。ともに見てまいります。

1 エリシャ

1) 召命(列王記第一19章16節)

エリシャが預言者として召命を受ける様子については、列王記19章16節に書かれています。あるとき主はエリヤにこう語ります。「エリシャに油を注いで、あなたに代わる預言者とせよ。」それでエリヤはエリシャを探しに出かけ、畑を耕しているのを見つけると、何も言わずに無言で自分の外套を掛ける。エリシャは自分が預言者として召されていることを直感し、すぐにエリヤに従って行きました。イエスがペテロとその兄弟アンデレを弟子に召していく様子とよく似ています。

2) 不安と恐れ

それからおそらく数年が経つてのことでしょう、エリヤがもうすぐ天に上げられるときのことです。「エリヤはエリシャに『ここにとどまっていなさい。主が私をベテルに遣わされたから』と言った。しかしエリシャは言った。『主は生きておられます。あなたのためにも生きています。私は決してあなたから離れません。』こうして、彼らはベテルに下って行った。」

同じようなやりとりが4節でも6節でもあって、あわせて三回繰り返している。強引と言えるようなエリシャの態度です。理由があります。エリシャの気持ちを考えてみましょう。エリヤはかつて八百五十人のバアルの預言者たちを前に、たった一人

で戦った人物として国中に知られていた有名な預言者です。一方のエリシャは田舎で畑を耕す農民に過ぎない普通の素人です。自分がエリヤの弟子ですと名乗るのも恥ずかしい。一日も早くエリヤと並ぶ預言者となるために、必死に学ぼうとしていたのではないか。それで離れようとしなかったということでしょう。それでもなんとか頑張って自信がついた頃、二人はヨルダン川にやって来ました。川を渡るときエリヤが外套を丸めて水を打つと水が両側に分かれます。それを見て、エリシャは自分にはもっと何かが必要だと気がつきます。

2 エリヤ

1) あなたのために何をしようか

そのタイミングを狙うように、エリヤはこう言います。9節。「渡り終えると、エリヤはエリシャに言った。『あなたのために何をしようか。私があるところから取り去られる前に求めなさい。』するとエリシャは、『では、あなたの霊のうちから、二倍の分を私のものにしてください』と言った。」

エリシャがどうしてこのようなことを要求するのかと驚くかもしれません。しかし、実は申命記21章17節に「長子の権利のある子どもには、自分の全財産の中から二倍の取り分を彼に与えなければならない」という定めがあります。エリシャはこの律法を根拠にして、エリヤの跡を継ぐ長子として、当然の権利を要求したと言うことはできます。しかしそれには筆の条件があります。相続は父親が亡くなって初めて行われるものです。ということはエリシャはエリヤに「早く死んでください」と言ったのと同じことになる。エリヤが「あなたは難しい注文をする」と苦笑したのはそういう事情からです。果たしてこのことはどうなっていくのでしょうか。

2) 竜巻で上げられる

11節。「こうして、彼らがなお進みながら話していると、なんと、火の戦車と火の馬が現れ、この二人の間を分け隔て、エリヤは竜巻に乗って天へ上って行った。」

アメリカではハリケーンと呼ばれる竜巻がしばしば発生し、家が土台から根こそぎ飛ばされて跡形もなくなるような大きな被害が起きます。あれを

見ると竜巻に襲われたら生きて帰れないだろうと誰もが思います。エリコの預言者たちもそう思ったようで、エリヤのなきがらがどこかに落ちているのではないかと探しに行った。ところがどこを探しても見つからない。そこで後の時代の人たちは、エリヤは生きて天に上げられ、もう一度イスラエルに戻ってくる、そういう言い伝えができたと言われます。

3) エリヤの霊がとどまる

エリヤはエリシャをどのようにして預言者として育てたのでしょうか。ここまで見る限り、エリヤはやるべきことをやり残したまま天に上げられてしまった、そのようにしか見えません。しかし神の時には遅すぎるとか、早すぎるといえることはないはずで、エリヤはやるべきことをすべてきちんとやり終えて上げられたと考えなければなりません。

エリシャはどうしたか。12節「エリシャはこれを見て、「わが父、わが父、イスラエルの戦車と騎兵たち」と叫び続けたが、エリヤはもう見えなかった。彼は自分の衣をつかみ、それを二つに引き裂いた。」そして14節。「彼は、エリヤの身から落ちた外套を取って水を打ち、「エリヤの神、主はどこにおられるのですか」と言った。エリシャが水を打つと、水が両側に分かれ、彼はそこを渡った。」

これを見ていたエリコの預言者たちは「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」と言ってエリシャがエリヤの後に続く預言者だと認めた。結論から言えば、やはりエリヤはやるべきこときちんとやって天に上げられたことになる。神の時は完全でした。

しかしそれですっきりしたわけではない。疑問が残ります。なぜエリシャはエリヤの霊をいただくことができたのでしょうか。そしてここで起きたことは、ただ欲しいと願っていたものが手に入ったという単純なことだったのか。もう少し深掘りしてみたいと思います。

3 神に出会う

1) 罪の自覚

エリヤはこう言っていました。10節。「あなたは難しい注文をする。しかし、私があなたのところから取り去られるとき、あなたが私を見ることができれば、そのことはあなたにかなえられるだろう。できないなら、そうはならない。」

ですので、エリヤが天に上げられるとき、エリシャは恐ろしいのを我慢してしっかりと見ていた。

だからエリヤの霊を与えられた。ということになる。ではなにを見たのか。エリシャは、エリヤと自分との間に火の戦車と火の馬が立ちはだかるのを見ました。それまでは、先生であるエリヤとはどんなことがあっても離れたくないと願っていました。だから、三度も先生の指示に逆らってずっとついていった。しかしここに至って、火の戦車と火の馬が二人の間を分けてしまい、これを乗り越えることできないことは、エリシャにも一瞬にしてわかりました。どうして乗り越えられないのか。神がそこにおられるからです。

神の臨在に触れた者はどうなるでしょう。預言者イザヤはこう言いました。イザヤ書6章5節。

「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の主である王をこの目で見たのだから。」

エリシャも同じです。彼は神の臨在に触れて身動きができなくなります。先生であるエリヤに「早く死んでください」と言ったことが深く心に突き刺さります。自分がいかに罪に汚れた者であるのかを自覚させられ、死が迫ってきて恐ろしくなる。自分の衣をつかみ、二つに引き裂いたのは、そのためでした。

2) 主の救い

しかしすべてが終わってみると、エリシャは死んでいません。このときエリシャは二つのことを学びます。

一つ目。神が罪に対して一切容赦せず厳しくさばく方であることを学びました。それでエリシャは自分の罪に絶えかねて衣を二つに引き裂きます。しかしそこで終わらない。

二つ目。もし罪人が自分の罪を悔いるならば、神はその罪を赦し新しいのちを与えてくださることを学びます。あの竜巻のなかで見た火の戦車、火の車、あの恐ろしい出来事があったのに、今自分が生かされているのは、神の赦しがあったからとしかいいようがない。

ではいったい、神はどのようにして罪を赦してくださったのでしょうか。エリヤがこう語っていたことを思いだしてください。「私があなたのところから取り去られるとき、あなたが私を見ることができれば、そのことはあなたにかなえられるだろう。」

エリヤはただ自分を見ていると言ったのはありません。エリヤを通して神が見せてくださるものにしっかりと目を留めなさいと言うのです。そこでエリシャは何を見たのでしょうか。エリヤが、竜巻に

巻き込まれて死んでいくのを見ました。それで自分は救われた。神の救いの方法とはこういうことである。耳で聞くのではなく、現実に関与して自分の先生の死を通して教えられていくのです。

エリシャは、エリヤの霊をいただきたいと最初に願っていました。しかし、大切なのはそういうことではない。主のさばきと救いを見ることこそが、もっとも大切であることをこのようにして教えられていきます。

3) キリストの十字架

このことはエリシャだけに起こるものではありません。エリヤの後に来られる方、主イエスキリストが私たちを救うためにいのちをお捨てになります。エリシャはそれを知りました。エリシャは水を打ちながらこう言いました。「エリヤの神、主はどこにおられるのですか。」言い換えればこういうことです。「エリヤを通して現してください、本当の救い主はどこにおられるのですか。」神はこの問いかけにどう応えられたでしょう。エリシャの前で川の水が二つに分かれ、彼はそこを渡って行きます。モーセの時に表された神の救い。それと同じことがここにもあります。目には見えなけれど、救い主が常に私たちとともにおられることをこのようにして示してくださいました。

私たちは、十字架から天に上げられていかれた救い主イエス・キリストを信じてまいります。